二〇一二年六月十四日（第1回）、十二月十一日（第2回）開催

留学生と語ろう！

上原由美子

第1回「留学について語ろう！　留学経験から私が得たもの」

■パネリスト……学部生：松本智明（本学国際言語文化学科ベトナム語専攻四年生）、川崎裕季菜（同インドネシア語専攻四年生）、陣山夏子（国際コミュニケーション学科四年生）、衣笠円香（同上）、後藤隆恭（同三年生）、留学生：FRANCO CUENCA ERIC（スペイン）、HUYNH THI LAN CHI, NGUYEN THI THU HUONG, TA HONG HANH（ベトナム）、MUHAMMAD MUCHLASIN, SARAH JENNIFER（インドネシア）、沈少娜、包夢真（中国）、朴壬卿（韓国）、申善云（台湾）

■司　会……上原由美子（本学留学生別科専任講師）

■コーディネーター……桝本智子（本学国際コミュニケーション学科准教授、グローバル・コミュニケーション研究所副所長）

第2回「大学ってなに？　大学生は何をする？　世界の大学生活を知ろう！」

■パネリスト……学部生：土屋夏実（本学英米語学科三年生）、松田和人（国際コミュニケーション学科四年生）、多昌恵美（同上）、菊地しのぶ（同三年生）、留学生：AMARIN PIYAWAN, PIYAPAI JARUWAN, SUPORNSIN JIRAWUT, VARAVUDTH SUKANDA（タイ）、劉学詩（中国）、呉奈娟、金ソリ（韓国）、HELENIUS JOHANNA（フィンランド）、高筱瑋（台湾）

■司　会……上原由美子

■コーディネーター……桝本智子

《「留学生と語ろう！」シリーズのパネルディスカッションは、学部生と留学生が異文化体験について本音で語り合う場として毎年実施されてきた。今年度は、留学生別科の一クラス（日本語インターアクション5）全員と留学経験のある学部生、あわせて各回十五名ほどが登壇し、「留学経験から得たもの」（第1回）、「世界の大学生活」（第2回）についてディスカッションを行なった。第1回、第2回とも、参加者全員が留学経験者であり、自らの異文化体験に基づいた活発な意見交換がなされた》

第1回　留学について語ろう！
留学経験から私が得たもの

第1回ディスカッションでは、留学経験を通じて学んだことや感じたこと、自分の変化、成長、および留学経験を今後の人生にどう生かしていきたいかなどについて語り合った。

まず、留学先で感じたこととして、学部生、留学生双方から、挨拶の仕方や人に対する接し方の違いなど、コミュニケーションに関する相違点が挙げられた。具体的には、留学生からは「日本人は知らない人に声をかけないので冷たく感じる。困っている人を見ても何もしない人が多いと思う」「日本人学生に飲みに行こうと誘われるが、具体的な話に発展しない。本当に行く気はないのかもしれない」などの意見が出た。また、学生の学習時間や学習態度の違いも挙げられた。留学生からは「日本では明るい時間に高校生が外を歩いているが、韓国では高校生は夜遅くまで学校や塾で勉強する。平日の午後に高校生の姿を見ることは少ない」「中国でも学生は朝から夜まで学校で勉強する」という話が出た。学部生からは「日本では授業中に寝ている学生がよくいるが、留学先のオーストラリアではそんな学生はいなかった」など、日本の学生があまり勉強しないのではないかという指摘が多く出た。一方で、留学生からは「スペインには塾がないが、日本の中学生・高校生の多くは塾に通っており、学校よりも塾で勉強しているのではないか」という意見もあった。また、留学生が日本に来て驚いたこととして、女子高校生のスカートの短さなど、日常のさまざまな気づきが挙げられた。

次に、学部生からぜひ留学生とディスカッションしたいトピックとして提案された「留学と就職活動のジレンマ」について話し合われた。学部生から「日本では留学したくても就職活動に遅れることを心配して諦める学生が多い」「三年生になってやっと勉強の面白さがわかり、留学したいと思った時期に就職活動に縛られてしまう」「他の国でもこのような状況があるのか」などの意見や疑問が提示された。多くの留

学生がこの日本の状況に驚きを示し、「自分の国では状況はまったく違う。留学をしてその地の文化を理解したり言葉を学ぶことは就職に大いに有利になる。留学で卒業が多少遅くなっても就職に影響はない」「日本の学生が留学をリスクと考えること自体、最初は理解できなかった」という声が出た。特にベトナムとインドネシアの留学生からは「私たちは、どうしても日本に留学したくて何度も試験に挑戦してやっと夢がかなった。交換留学の枠があるのにチャンスを逃すのはもったいないと思う」という意見が出た。一方で、学部生たちはいずれも、自らの経験から、留学で得たさまざまな経験は就職に役に立つと思うと述べた。また、就職活動中および活動を終えた四年生たちが、聴衆の学部生に留学の価値を強く訴える姿が見られた。具体的には「私は就職活動の開始時期に不在でスタートが遅れたが、留学経験が評価されて採用されたと思う」「現在は、留学経験のある学生を採用したい企業も増えてきており、就職活動を理由に留学を諦めるのはもったいない」「一般的に知られている企業以外にも、新しいＩＴ系の企業など、本当に外国語を必要としている企業も増えてきている」「もはや留学をリスクと考えたり心配したりする必要はないと思う」「一年間程度の留学は履歴書に書いても意味がないと言われるが、むしろ積極的にアピールしたほうがいい」など、留学が就職にもプラスであるとする意見が多く出た。また、ある四年生の学部生は「企業の面接で『君のベトナム語より上手な日本語を話す外国人がたくさんいるのに君を雇うメリットがあるのか』と必ず聞かれるが、その地でビジネスをするなら、これからは、そこの言語や文化を理解している日本人がこちらから飛び込んで行って、その地の人の心をつかむ必要がある」と、グローバルなビジネスに関する自分の考えを示し、他の学部生や留学生が共感する場面も見られた。

最後のトピックとして、留学を通して自分が変化・成長した点について話し合われた。留学生・学部生ともに肯定的な意見が多く、「さまざまな体験を通して視野が拡がった」「自分の価値観がすべてではないことに気づき、多様な見方ができるようになった」「他者を受け入れられるようになった」「その土地の言語や文化を理解し学べたことは自分の財産」「留学先で自国のことを質問され、もっとよく知る必要性を感じた。同時に自国のよさがわかり、好きになった」「家族など身近な人を大

壇上で発表を行なう学部生・留学生

切にするようになった」などの意見が出された。

聴衆との質疑応答では、「留学先で就職したいか」という質問に対して、留学生・学部生双方から「自国に軸を置きながらも、互いの国とのつながりのある仕事がしたい」といという回答があった。

第2回　大学ってなに？　大学生は何をする？
世界の大学生活を知ろう！

第2回ディスカッションでは、世界の大学生はどのような生活を送っているのか、具体的には、授業、アルバイト、クラブ・サークル活動などの日々の生活から、受験や卒業、就職まで、自国と留学先の大学生活について語り合った。

まず、大学入学以前の中学や高校の生活について各国の様子を簡単に報告し合った。中国と韓国では、中学生、高校生は早朝から夜遅くまで学校にいて、授業時間以外は自習をするという報告があった。韓国の高校生は毎日午後十時まで、学生によってはそのあと塾で午前二時まで勉強する人もいるという話に、学部生や他の留学生および聴衆が驚くという場面があった。タイでは、高校時代は一番楽しい時期であり、放課後は友達と楽しむ人が多いということであった。留学生の国ではいずれも部活はあまり盛んではないとのことであった。一方、学部生は、中学・高校時代に部活に打ち込んだという学生が多かった。学部生から「日本では、部活は人間関係を作るという目的もあると思う」という意見が出た。

次に、大学生の生活に関しては、タイと韓国の留学生から「日本人の大学生は、上級生と下級生のつながりが薄いように感じる。自国では入学後に互いに親しくなるための活動やトレーニング期間があり、それを通して上級生と下級生の強いつながりができ、よく飲みに行ったりもする」という話があった。学部生からは「日本の大学生は、授業のあとはアルバイトやサークル活動、休日は友だちと遊びに行ったりすることが多いが、他の国ではどうか」という質問が出た。この質問に「タイではアルバイトの時給が安いこともあり、普通の大学生はアルバイトをせず、勉強をしたり友達と一緒にすごす。ただし、夏休みは経験のために自分の専門に関係のあるアルバイトをする」「フィンランドでも、夏休み以外はあまりアルバイトはしない。朝から、日によっては夜まで授業があって忙しいし、国からの生活費援助もあるから」「中国でも、大学生は朝から夜まで勉強する。アルバイトは夏休みだけ」と、留学生の国ではいずれも大学生は一般的に夏休み以外はアルバイトをしないという回答であった。

次に、大学の勉強については、留学生たちが自国での勉強の厳しさに言及し、「ダブルメジャーなので勉強が大変」「タ

イではレポートといえば二〇～三〇枚、発表は二〇～三〇分が普通。日本の大学生の勉強は楽そうに見える」という意見が出た。一方、学部生たちは日本と留学先を比較し、「留学先のアメリカでは勉強が本当に大変だった。神田外語大学も日本の大学としては宿題が多いほうだと思っていたが、比較にならない」「宿題以外にも、授業でディスカッションするために、事前にたくさん読んでいかなければならなかった。ディスカッションに参加しないと成績がもらえない」「最初のころは英語の読み書きにも時間がかかり、とにかく集中して勉強した」と、留学先での課題の多さや勉強の厳しさについて述べた。

続いて、各国の英語の学習状況について話し合われた。留学生からは「韓国では今は英語はできるのが当たり前という状況になっている。子供のころから勉強する。ＴＯＥＩＣでは差が出ないので、ＴＯＥＦＬを使ったり、就職の面接では英語での討論があったりする」「台湾でも英語ができるのは普通のこと。私の大学では日本語学科の学生でもＴＯＥＩＣで七五〇点をとらないと卒業できないし、企業の面接も受けられない」「中国の私の大学では卒業時に英語の試験に受からないと、卒業証書はもらえても学士号はとれない。大連では幼稚園から英語をやっている子供が多い」「フィンランドでは英語ができるのは自然なことなので、大学では英語のテストはない」と、多くの国では英語ができるのが当然、または当然になりつつあるという状況が報告された。一方で「タイでは小学校一年から英語をやっているが、話す練習をしないので話せる人が少ない」という報告もあった。学部生からは「アメリカに留学して『英語ができるだけではダメだ』と気づかされた。『専攻は英語です』と言うと、『あとは？　それから？』と聞かれる。言語はスキルの一つでしかなく、他の専攻が必要だと思い知らされた」「就職活動を終えて、日本でも英語だけでなく、もう一つ言語ができると強いと思った」という話があった。

次に、留学生から出された疑問として、第1回に引き続き、日本における留学と就職活動の関係について話し合われた。留学生から「タイ語専攻の日本人の友だちが『タイに留学したいけれど就職活動が心配で諦めた』と言っていた。そのようなことは多いのか」と質問が出た。これに対し、学部生からはいずれも自らの留学経験を肯定的に捉えた次のような意見が出た。「私は三年生から四年生にかけて留学して就職活動の開始が遅れたが、留学経験は就職活動において強みになったし、人生の中で大切な経験だったと思う」「最近は、グローバルな経験を持つ学生が欲しい企業も増えており、留学経験者向けの説明会などもある。就職活動のために留学を諦めなくてもいいように社会が変わってきていると思う」。

一方で、「自分は本当は四年生で留学生したかったが、就職活動を考え、無理をして三年生で留学した」「エントリーの締め切りに間に合わないと面接が受けられない企業が結構ある。最近は少しずつ柔軟になってきているとはいえ、自分の周りには、やはり就活の時期を逃すのが怖くて留学できない、という人も多い。まだそういう面があると思う」という現状報告もあった。留学生からは「韓国では、留学は就職の準備と考える面があり、私も就職に有利だと思って留学を決めた」「タイには外国企業がたくさんある。言語ができる人は失業しない。特に留学経験がある学生は企業に求められる」「タイでは就職活動の時期というものがなく、卒業してからでも就職できる」など、留学は就職に関してメリットになるということが述べられた。

最後に、大学における卒業や進級について話し合われた。留学生からは「タイでは、大学を卒業するのはとても大変。進級も難しく、学年を追うごとに学生数が半減していく。その代わり、大学を卒業できれば必ず就職できる」と、日本とは異なる状況が報告された。

聴衆との意見交換では、留学生から「留学期間は短く、時間の大切さを実感している。休日も大切にし、いろいろな経験をしたい」などのコメントがあった。

司会の上原由美子先生

発表者の意見に耳を傾ける学生たち

壇上での活発な議論

まとめ

二回のディスカッションに共通して学生から発題されたトピックとして「留学と就職活動のジレンマ」の問題があった。留学を考える学部生にとっては不安の種であり、留学生には不思議に映る日本の現象のようである。これに関して、留学から帰ってきた学部生がいずれも「留学経験は就職にもプラスになる。社会が変わってきていると思う」という実感を伝えたことや、留学生たちによる各国の状況報告が、留学を迷っている聴衆の学部生を勇気づけたようであった。

もう一点、二回のディスカッションに共通して話題に上ったことは、日本の学生は他の国の学生と比較して勉強量が少ないのではないかという点であった。留学生の母国では、中学生・高校生・大学生がかなり勉強しているということ、また、留学した学部生が、留学先での勉強の厳しさを実感したということ、および海外では大学生は複数の専攻を持ち、また英語ができるのは当然という状況になっていることなどを聞き、危機感を感じた聴衆の学部生も多かったようである。

聴衆との意見交換は、時間の都合もあり、あまり活発にできなかったが、イベント後の懇親会の場で学生同士がよりリラックスして本音で語り合う姿が見られた。

参加した留学生に後日、感想を聞いたところ、「今まで日本人や日本社会に抱いていた疑問、具体的にはコミュニケーションのあり方の違いや人間関係、就職活動などに関して、同年代の学生と率直に話し合えてよかった」「とても楽しかった」「このディスカッションの準備を通して、複雑な考えを日本語でまとめて言えるようになった」というコメントが多かった。参加した学部生からも「とても楽しかった」「もっと早くから留学生と交流する機会が持てればよかった」という声が聞かれた。

今後の課題としては、双方で意見を出し合うだけでなく、一つの問題を異なる視点から議論できるディスカッションにしていくこと、および、より多くの聴衆に積極的に参加してもらえる企画にしていくことが挙げられる。